日本遺産認定を目指して

菊池川流域の歴史的魅力や特色、文化財（史跡、伝承、文化、食など）を活用した「日本遺産」認定を目指し、菊池川流域の3市1町（菊池市、山鹿市、玉名市、和水町）と熊本県が互いに手を取り合い、認定に向けた取り組みを続けています。

【問い合わせ先】生涯学習課 文化振興係 ☎0968(25)7232

「日本遺産」とは

2020年東京オリンピック・パラリンピックの開催を前に、文化庁は「日本遺産」の認定を始めました。「地域の文化遺産を、国内外に広くアピールし、多くの人に来てもらおう」というのが主な目的です。現時点で国内37カ所の地域で日本遺産の認定を受けており、県内では、人吉球磨地域の「相良700年が生んだ保守と進取の文化」が認定されています。

そして平成27年10月、菊池川流域の3市1町（菊池市、山鹿市、玉名市、和水町）と県が「菊池川流域日本遺産認定推進協議会」を結成しました。

▲菊池川流域日本遺産認定推進協議会
参加委員が日本遺産認定に向けて連携することを誓いました

菊池川流域での日本遺産認定に向けて

菊池川流域の人々は、この川から多くの恵みを受けてきました。なかでも特筆すべきは、ミネラル豊富なおいしい水に育まれたお米。実は江戸時代、菊池川流域からその6割が出荷されたといわれる肥後米は、天下の台所大坂で「天下第一の米」として高値で取引されていた、ブランド米だったのです。

今回の申請では、この米作りにまつわる人々の努力とそれがもたらした繁栄の歴史にスポットを当て、菊池川流域の魅力を余すことなくアピールします。

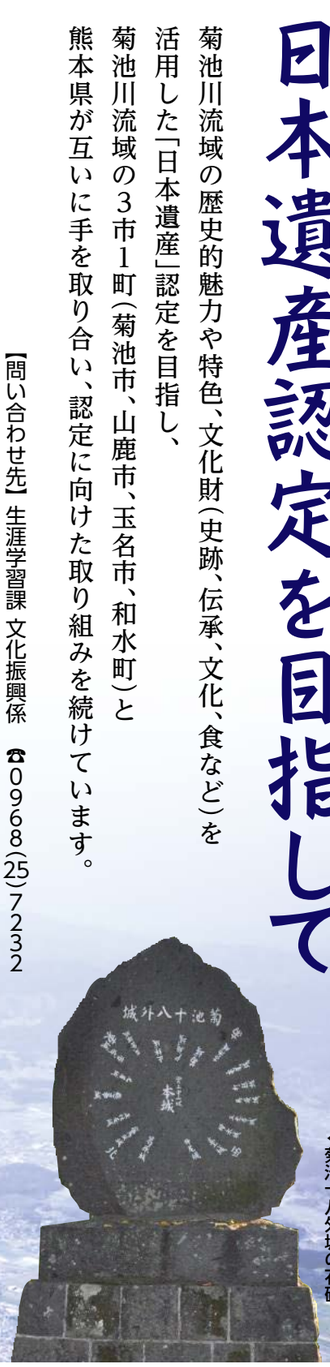
日本遺産認定に必要な条件

日本遺産は文化財そのものが認定されるのではなく、その地域の歴史的ストーリーが認定されます。そのストーリーは、日本でここだけしかない「オンリーワン」のものであることが条件です。

菊池川流域には、全国一の数を誇る装飾古墳をはじめ、江田船山古墳、鞠智城、菊池一族関連史跡、菊池川河口の干拓堤防、明治時代の芝居小屋八千代座など多彩な文化財などが点在しています。また、肥後神楽や雨乞い踊りのほか、五穀豊穣を願った祭など、古来の風習や芸能などが各地で受け継がれています。現在協議会では、これら数多くの文化財をつなぎ合わせながら、オンリーワンの歴史的ストーリーを作成しています。

▲御松囃子御能
国重要無形民俗文化財に指定されている

▲菊池米
ミネラル豊富な水と肥沃な土壌が育む菊池米は全国で高い評価を受ける



◀菊池十八外城の石碑

日本遺産のメリット

日本遺産に認定されると、次のような事業に補助金を受けることができます。

① **情報発信、人材育成事業**（多言語 HP・パンフレットの作成、ボランティア解説員の育成など）
② **普及啓発事業**（発表会、展覧会、ワークショップ、シンポジウムの開催など）
③ **調査研究事業**（資料収集など）
④ **公開活用のための整備に係る事業**（説明板の設置など）

各地に点在している貴重な文化財をストーリーでつなぎ、日本遺産という大きなブランド力を持たせることで魅力溢れる観光資源に磨き上げ、地域に全国各地から、そして世界中から人を呼び込み、地域を元気することを目指しています。

龍門ふるさと祭り 第30回記念

菊池アートフェスティバル in 龍門

菊池アートフェスティバルin龍門（以下アートフェス）が11月3日から6日の4日間、旧龍門小学校をメーン会場に開催されました。

旧校舎内には絵画や立体作品などさまざまな作品を展示。他にもアートパフォーマンスや作品作りを体験できるワークショップなど、多種多様なアーティストの作品が一堂に会し、来場者を魅了しました。

雑貨や飲食などを販売するマルシェも同時開催。延べ約6千人が来場し、普段は静かな龍門地区が大きくにぎわいました。

地域とアーティストのコラボで実現した今回のアートフェス。にぎわう会場の模様をリポートしながら、携わった人々の思いに迫ります。

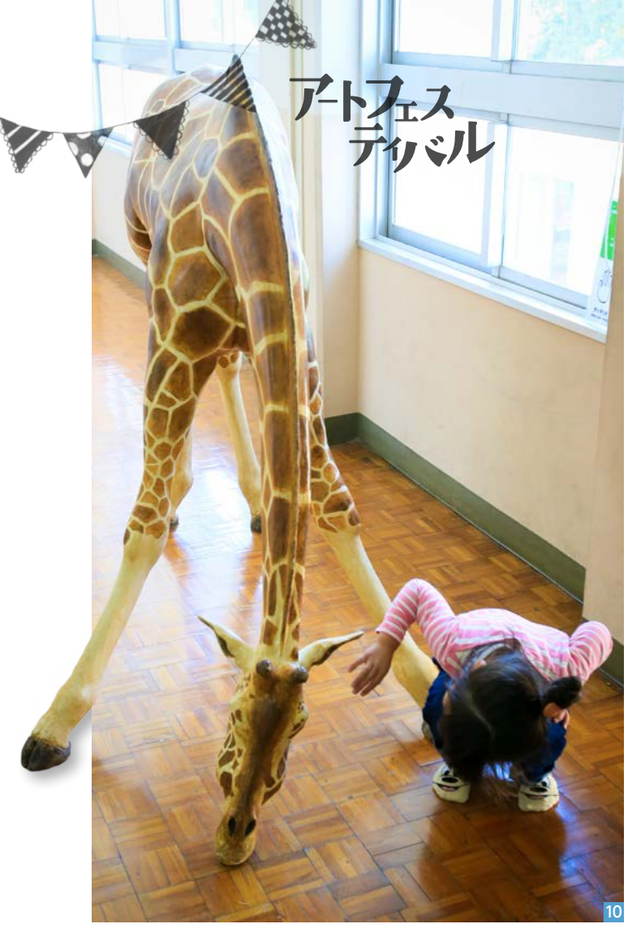
旧校舎が美術館に様変わり

「わーキリンだ。本物みたいだね」2階の廊下ではしゃぐ子どもの声が響きました。「フェイスブックでイベントを知り、親子で楽しめそうだと思い遊びに来ました。旧校舎を美術館にできるなんて素敵ですね」とママも楽しそうです。

参加したアーティストの数は約70人。東京や北海道から来た作家もいます。出品数は300点を超え、教室や廊下のほか、階段の踊り場にも展示されました。缶バッジや竹筆作りなどの体験ブースもあり、来場者は作家の手ほどきを受けながらモノづくりにも挑戦。マルシェには最大約70店舗が出店し、アートとグルメとショッピングを満喫しました。

期間中は天気にも恵まれ、山あいの旧校舎はたくさんの来場者で大にぎわい。「学校の文化祭のようで懐かしい気持ちになれた」「竜門ダムに来て偶然立ち寄ったが、充実していて面白かった」と評判も上々。参加したアーティストも「美術館だとアートが好きな人しか足を運ばない。今回は普段アートを見ない人が大勢来てくれたのでうれしい」と目を細めました。

※ AR のアイコンがある写真は動画を見ることができます。視聴方法は 43 ページをご覧ください。



Kikuchi
Art
Festival

1_本格的なアート作品を一目見ようと大勢の人が訪れ、普段は静かな旧校舎に人々の声が響いた／2.3.4.5.6.7.8.10.11_工芸、彫刻、絵画、工作など、大小さまざまな作品が並び来場者の目をくぎ付けにした／9_体験型のワークショップで子どもたちもアーティストの仲間入り／12_同時開催のマルシェでは買い物や食事を楽しんだ／13_チェーンソーアートの実演。全国から腕自慢が集まった／14_まるで本物のマネキンのようなパントマイムパフォーマンスに子どもたちもびっくり／15_書道とタップダンスの異色コラボによるパフォーマンス

Kikuchi
Art
Festival

地域住民×アーティスト×地域おこし協力隊

菊池をアートで元気にしたい――

アートフェス誕生のきっかけは、本年度から地域おこし協力隊に着任した橋本眞也さんの発案でした。そこに賛同した地域住民、アーティスト、マルシェの人たち。それぞれが一体となり、初開催のイベントを成功に導きました。

地域活性化につながると確信

「こんなにたくさんの人が集まったのは、ダムの完成時以来じゃないかな」

龍門地区会長を務める小川正剛さんは振り返ります。橋本さんから相談された際、「新鮮な企画は田舎の住民にとって刺激になる。地域が活性化すると確信した」と協力を即答したそうです。開催予定の11月は、30周年を迎える「龍門ふるさと祭り」の開催月。両方のイベントを盛り上げる目的で、同祭の一部としてアートフェスを行うことになりました。

小川さんはアートフェスの実行委員長への打診を快諾。龍門の各地区長に趣旨を説明するなど、運営と地元住民の調整に大きな役割を果たしました。「開催前は人が来るのか不安だったけれど、初日の朝から大勢の人が来てくれました。学校跡がにぎわうのはうれしいですね」

住民からは来年の開催を望む声も。「地域の人たちが前向きに協力してくれたのが大きい。新しい文化に触れて、眠っていた心が刺激された人も多いと思う」

普段はのどかな時間が流れる龍門地区。アートフェスは、外からの風を多く運んで地域を活性化してくれたようです。

アートが身近になる日

「旧校舎が舞台のアートフェスは、親子連れに人気のマルシェと相性抜群でした」と話すのは、マルシェを運営した佐藤由紀さんです。参加店舗の募集に加え、会場の飾りつけや掃除など縁の下の力持ちとして奔走しました。「実行委員で意見がぶつかることもあったけど、来場者が楽しむ姿を見てやって良かったと感じました」

子どもたちの楽しんでいる姿が印象的だったと佐藤さん。「美術館に行ったことがない子どもたちでも、気軽にアートとふれあっていました。思い出に残るイベントになったと思います」

地域とともに歩むアートフェス

出展するアーティストの募集で大きな役割を果たしたのは、若手アーティストを支援する団体「KAO」の代表を務める長尾祐二さん。橋本さんからの協力依頼を受け「普通の展示場ではなく、旧校舎でやる企画が面白そう」と感じて会場を訪れました。

普段は熊本市内で活動しており、龍門地区のような山間地での展示会は不安も多かったと言います。「龍門はアクセスが良いとは言えず、美術館にあるような照明設備も無い。展示会をするには条件が悪いと感じていました」

しかし、実際に現場に来ると、不安は一気に期待感へと変わります。「豊かな自然に、背後にそびえる竜門ダム。地域そのものがアートのようで、心が動かされました。ここなら地域と一体化したアートフェスができると思ったんです」

長尾さんの声かけで、たくさんのアーティストが集まりました。「マルシェを目的に来た人が、ついでに作品も見てくれる。普段は展示会に来ないような子どもや高齢者など、幅広い世代の人が来場してくれたのが印象的」と、アートフェスならではの魅力を実感。「地域とともに歩んでいけるアートフェスに大きな可能性と手応えを感じました。菊池は本当に美しい。次回以降も継続して関わっていけたらうれしいですね」

1.2_ 手作りの看板や道案内のかかしで来場者をおもてなし。準備には地元住民と地域おこし協力隊のメンバーが協力した／3_ ロンロン館には中学生の作品を展示／4_ 旧校舎内で展示する作品を仕上げるアーティスト。「静かで空気がおいしい。創作活動にも最高の環境ですね」

雑貨 bb
佐藤由紀さん（下長田）

龍門地区会長
小川正剛さん（雪野）

KAO 代表
長尾祐二さん（熊本市）

※ KAO…Kumamoto Art Organization の頭文字

アートフェスティバル

多くの人の支えで実現

自然豊かな菊池の風景は「芸術の里」のイメージにピッタリ。自分も趣味で絵を書くので、菊池をアートで活性化したいと思っていました。

構想を描き始めたのは昨年５月。地域おこし協力隊として着任して間もない時期で、当初は先が見えず手探りの状態でした。出展してくれるアーティストはいるのか、マルシェは協力してくれるのか、地域住民は受け入れてくれるだろうか…。小川地区会長、KAO の長尾代表、雑貨 bb の佐藤さんらと連携できてから、ようやく具体的な着地点が見えてきました。

運営で私が常に心掛けていたのは、地域住民を置き去りにしないこと。地域と一体化できるアートフェスになるよう、努めてきたつもりです。要領が分からず多方面に迷惑をかけてしまいましたが、多くの人に支えていただき、無事に開催できました。「次回はいつ？」「今度はどんなアート展をやるの？」とうれしい言葉もたくさんいただきました。今後の詳細は未定ですが、次回も地域を元気にできるような仕掛けで貢献していきたいです。

本市では現在、10 人の協力隊員が各自の専門分野の仕事を持って活動しています。アートフェスは協力隊のメンバーも運営に協力してくれました。みんな「菊池市を元気にしたい」という同じ思いで頑張っています。これからも市民の皆さんと一緒に地域おこしに取り組んでいきますので、ご協力をよろしくお願いします。一緒にふるさと菊池を元気にしていきましょう！

地域おこし協力隊
にぎわい創出プランナー
橋本眞也さん